

古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ背面釧の流通について

中村友昭

鹿児島市立ふるさと考古歴史館

NAKAMURA Tomoaki

Kagoshima City Museum of Archaeology

はじめに

弥生時代や古墳時代における“地域間交流”や“遠隔地交易”を裏付ける考古資料の一つに、琉球列島⁽¹⁾産貝を素材とした製品がある。琉球列島産貝は、種子島から沖縄本島までの海を生息の中心とし、その製品は種子島や九州島以北の本土地域、さらには朝鮮半島まで分布を確認することができる。このことは、琉球列島産貝を介した地域間交流、いわゆる“南海産貝交易”として現在まで広く認知されるにいたっている。

琉球列島産貝を素材とした製品の主体となるのは腕輪である。そのなかでも、ゴホウラを素材とした腕輪は、弥生時代から古墳時代の長期間、広範囲に分布する。そのため、使用状況の変遷をたどることが可能であり、琉球列島産貝製品研究の指標となる資料といえる。特に、古墳時代のゴホウラ製の腕輪については、該期編年に不明瞭な点の多い琉球列島との関係を探る上で、有用な資料であると考えられる。

本稿では、古墳時代に主体として使用されるゴホウラの背面を利用した腕輪（以下、ゴホウラ背面釧）を対象として、その加工の差異を中心に検討し消費地（貝釧が出土する地域）の様相を示す。また、奄美・沖縄諸島におけるゴホウラ背面釧の加工途中品（未製品）と考えられる資料について、消費地の製品と比較し、その関係性を検討する。以上を踏まえ、古墳時代におけるゴホウラ背面釧の流通の様相を提示することを目的とする。

1. ゴホウラ背面釧の消費地における様相

1.1. 古墳時代のゴホウラ背面釧の二者

ゴホウラは、スイショウガイ科に属する大型の巻貝の一種である。奄美・沖縄諸島以南の熱帯太平洋に分布し、水深10～40mの海底に生息している。釧の利用部位には、背面か腹面の二箇所が選択されており、本稿で取り扱う古墳時代の貝釧には、背面が利用されている。ゴホウラは“独特な部位”を有することから、特異な形状を呈する。“独特な部位”とは大きく、①突起状の瘤（一大結節）、②一大結節から下端にかけての独特な曲線、③外唇から上唇、螺塔にかけての袖の広がり の3点である。これらの部位（以下、部位①～部位③）の存在が、左右非対称（殻軸を基準として見た場合）であるゴホウラの形状を構成し、特異な形の要因となっている（図1）。このような、左右非対称の形状を呈すゴホウラを素材とした貝釧の形状を見ると、左右非対称のものと左右対称のもの の二種が存在することがわかる。この差異は、釧製作において、素材の特徴を“採用”する加工と、“改変”する加工がそれぞれに施されたと考えられることから、製作意図の差異を端的に表す要素と考えられる。そこで、ゴホウラ背面釧における左右対称と左右非対称の別を分類の基準として、それぞれのゴホウラ背面釧について検討したい。

まず、左右対称となる釧を挙げる（図2）。これらの貝釧の形状は、縦長の楕円形を呈する。ゴホウラの部位①～③は、全て除去あるいは加工が施され、その結果、左右対称の形状が造り出されている。これは背面において、より中心側を腕輪として選択することで、背面外縁に存在する部位①～③

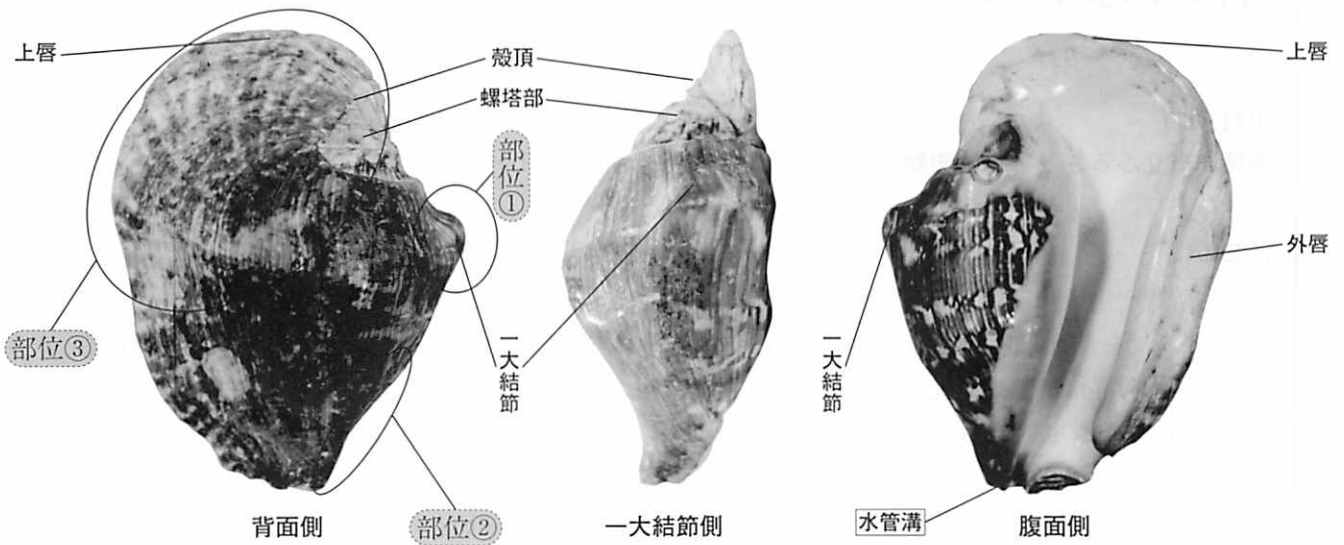


図1 ゴホウラの各部位

部位①：一大結節に見られる瘤状の突起。 部位②：一大結節から下端にかけての独特な曲線。
 部位③：外唇から上唇にかけて広がり、螺塔部を覆うほどの袖。

は採用されなかったことが要因として挙げられる。厚さが素材に比べ薄いこともその影響だろう。また、列点文が施されている例を確認できることも特徴である(図2-1、2)。こうして製作された貝釧は概ね似通った形状を呈し、その法量にも大きな差異は存在しない。これらは、種子島広田遺跡出土のゴホウラ背面貝輪のうち、下層タイプ(木下2000)とされた釧である。よって、これら一群に関しては、従来の名称を引き継ぎ、「広田下層型釧」とする。

次に、左右非対称の釧を挙げる(図3)。まず、素材の部位①は、広田下層型釧同様除去されている。ただし、資料によっては完全に除去されておらず、やや膨らみを残しているものも存在する。部位②に関しては、全てに独特の曲線を確認できることから、素材の特徴がそのまま採用されていると考えられる。また、部位③については、上唇にかけての袖の広がり確認できるが、殻頂より上方の上唇は除去されている。しかし部位①の加工同様、全てが一樣ではなく細かな差異は存在する。これらの左右非対称の一群は、木村幾多郎により「繁根木型貝輪」として紹介されているものが該当し(木村1980)、現在でも古墳時代を代表するゴホウラ製釧として広く認知されている。よって、これら一群に関しては、従来通り「繁根木型釧」とする。ここで注意しなければならないが、木村は繁根木型釧の説明の中で、素材の特徴的部位における加工の差異から、さらに二種に細分している。これは、先述した部位①・③の加工の差異に該当するものである。しかしながら、筆者も含めそのことについてこれまで具体的に論及したものはない⁽²⁾。例えば、熊本県玉名市伝左山古墳例(図3-1)は、部位②が認められる以外は全体的に大幅な加工が施されており、列点文が施されている点など広田下層型釧に近い特徴を有する。また、図3-2~4の資料は、部位③への加工が図3-5~8の資料に比べ大幅になされ、螺塔を全て採用するにはいたっていない。釧の厚さも薄く、輪の幅も若干ながら狭い。法量を見ると明らかに小型のものがある。このような繁根木型釧の形状の差異は、繁根木型釧の成立や古墳築造域間の繁根木型釧の入手過程に関係すると考えられる。このことについては別稿に改めたい。

以上より、古墳築造域におけるゴホウラ背面釧には、部位①~③の加工の差異から、少なくとも広

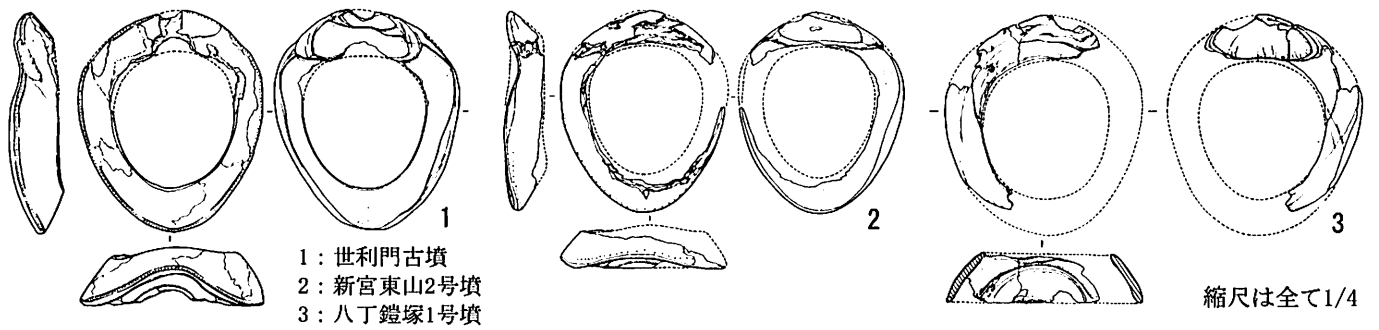


図2 古墳築造域出土広田下層型釧

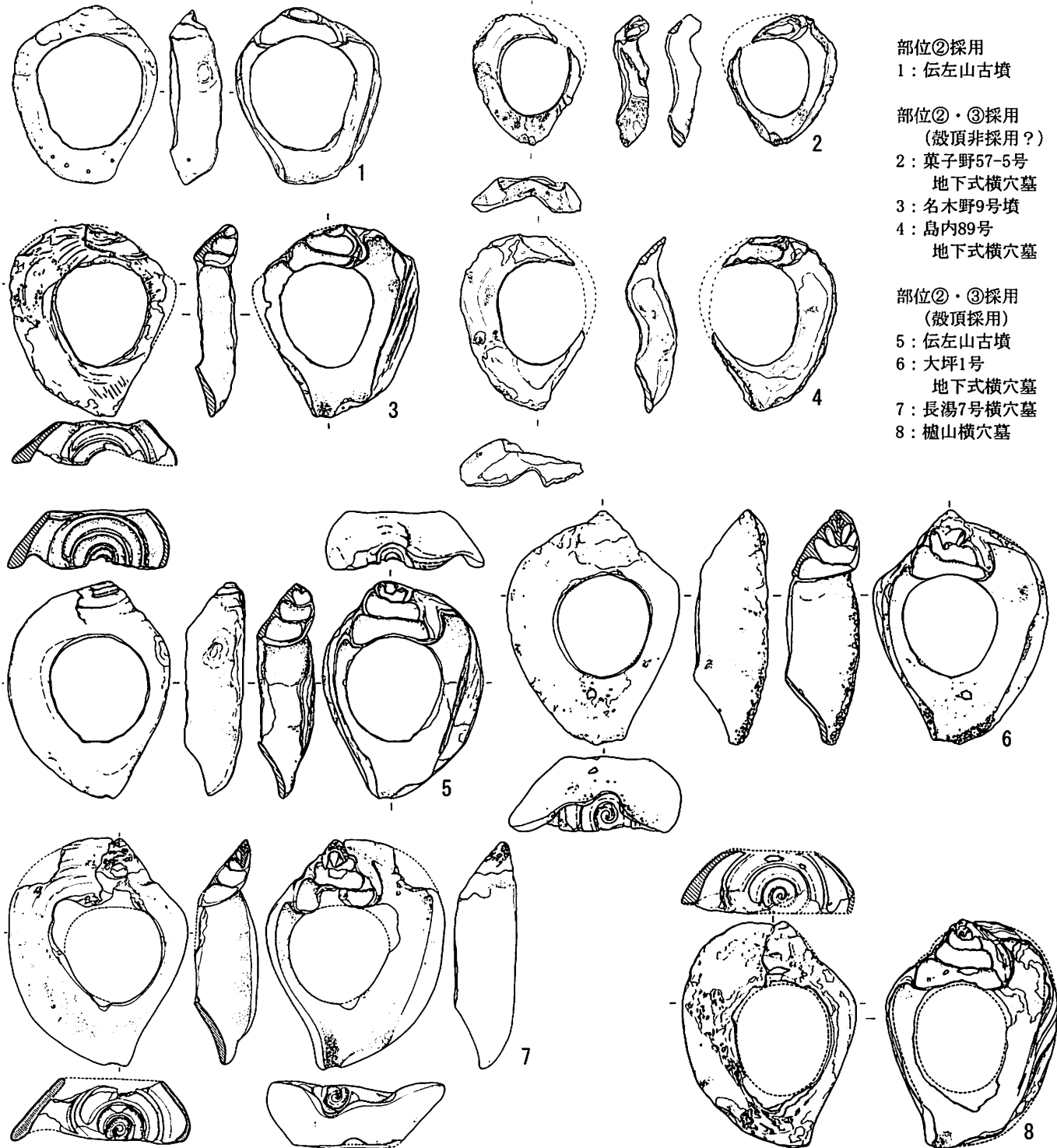


図3 古墳築造域出土繁根木型釧 (縮尺: 1/4)

田下層型釧と繁根木型釧の二種に分類できることがわかる。なお、部位①については、基本的に除去する点が両者に共通していることを注意しておきたい。

1.2. ゴホウラ背面釧の古墳築造域における分布

次に、古墳築造域におけるゴホウラ背面釧の分布状況について検討する。まず、広田下層型釧はこれまでに7遺跡11例⁽³⁾が確認されている(表1)。分布状況から、中部地方や瀬戸内海周辺、そして九州島の北東部(別府湾岸や臼杵湾岸周辺)に分布することが分かる(図4)。また、先述したように、種子島広田遺跡にも多数出土している。古墳築造域間では、広田下層型釧の分布は点的ではあるものの、列点文が施される例やゴホウラ以外の琉球列島産貝釧(イモガイ・オオツタノハ)を周辺で確認できる点(中村2008)が広田遺跡と共通しており、広田遺跡を起点とした消費地間の流通経路を想定できる。

繁根木型釧は13遺跡17例が確認されている(表2)。分布状況から、そのほとんどが九州島に集中しており(図5)、広田下層型釧の分布とは重複しないことが特徴として挙げられる。また、九州島内における分布を見ても、出土状況や共伴遺物、周辺における他種素材の琉球列島産貝釧の出土状況を考慮すると、南部九州(宮崎県の内陸部)と北部九州(有明海沿岸や筑後川流域)の二地域に大別できる。具体的に述べると、前者では、繁根木型釧は全て地下式横穴墓から出土している。男性への着装が基本で、共伴する遺物において、数量や種類で他者を圧倒する例はみられない。また周辺では、ゴホウラ以外の琉球列島産貝釧が大量に使用されていることも特徴⁽⁴⁾である(中村2008)。後者では、前方後円墳や円墳、横穴墓から出土している。着装状況の判然としない例がほとんどであるため、着装者の性差や着装の有無について単純に比較できない。共伴遺物を見ると、甲冑や馬具などの豊富な鉄製品や金銅製品、鏡などがあり、南部九州のそれとは明らかに異なる。特に、渡来系遺物が多く含まれる点や分布の一端が朝鮮半島に及んでいる点などは、朝鮮半島との関係を考える上で重要であろう(木下2002、朴2002)。なお、他種素材の琉球列島産貝釧については、イモガイ製釧が散見される程度で、繁根木型釧が主体となっている点も南部九州とは異なる⁽⁵⁾。

以上より、ゴホウラ背面釧の分布に関し、広田下層型釧と繁根木型釧にはその分布域に大きな差異があることを指摘できる。また、繁根木型釧の分布には、共伴遺物や周辺に存在する他種素材の琉球列島産貝釧から、それぞれの分布域における位置づけ(繁根木型釧の価値)の差異も含めた地域差(北部九州と南部九州)の存在を想定できる⁽⁶⁾。

1.3. 広田下層型釧と繁根木型釧の編年的位置づけ

筆者は以前、ゴホウラ背面釧を含めた古墳時代中期の琉球列島産貝釧について検討した際、広田下層型釧と繁根木型釧には明確な時期差があることを指摘した(中村2008)。それは、広田下層型釧を古墳時代前期末(後葉)から中期前半に、繁根木型釧を中期後半から後期前葉に位置づけたもので、その理解は概ね変わっていない。よって、本稿でも上記の編年的位置づけを応用する。ただし、先述したように、繁根木型釧の形状の差異(①図3-1、②図3-2~4、③図3-5~8)や分布域の差異を考慮すると、古墳時代中期後半から後期前葉において段階的な変遷を指摘できる可能性がある。

なお、上記の琉球列島産貝釧の編年的位置づけと実年代との対応についてであるが、後述する種子島広田遺跡以南の古墳非築造域出土の資料と比較する際、古墳築造域の時期区分のみで検討をすすめると、両地域の関係性を理解する上で不都合が生じる(杉井2010)。両地域で異なる時期区分が用いられている現状において、必ず顕在化する問題である。よって、本稿では、杉井健が提示した古墳時代時期区分と実年代との対応案を参考とし、古墳時代前期後葉~中期前半を4世紀後半~5世紀前半、古墳時代中期後半~後期前葉を5世紀後半~6世紀前葉に位置づける⁽⁷⁾。

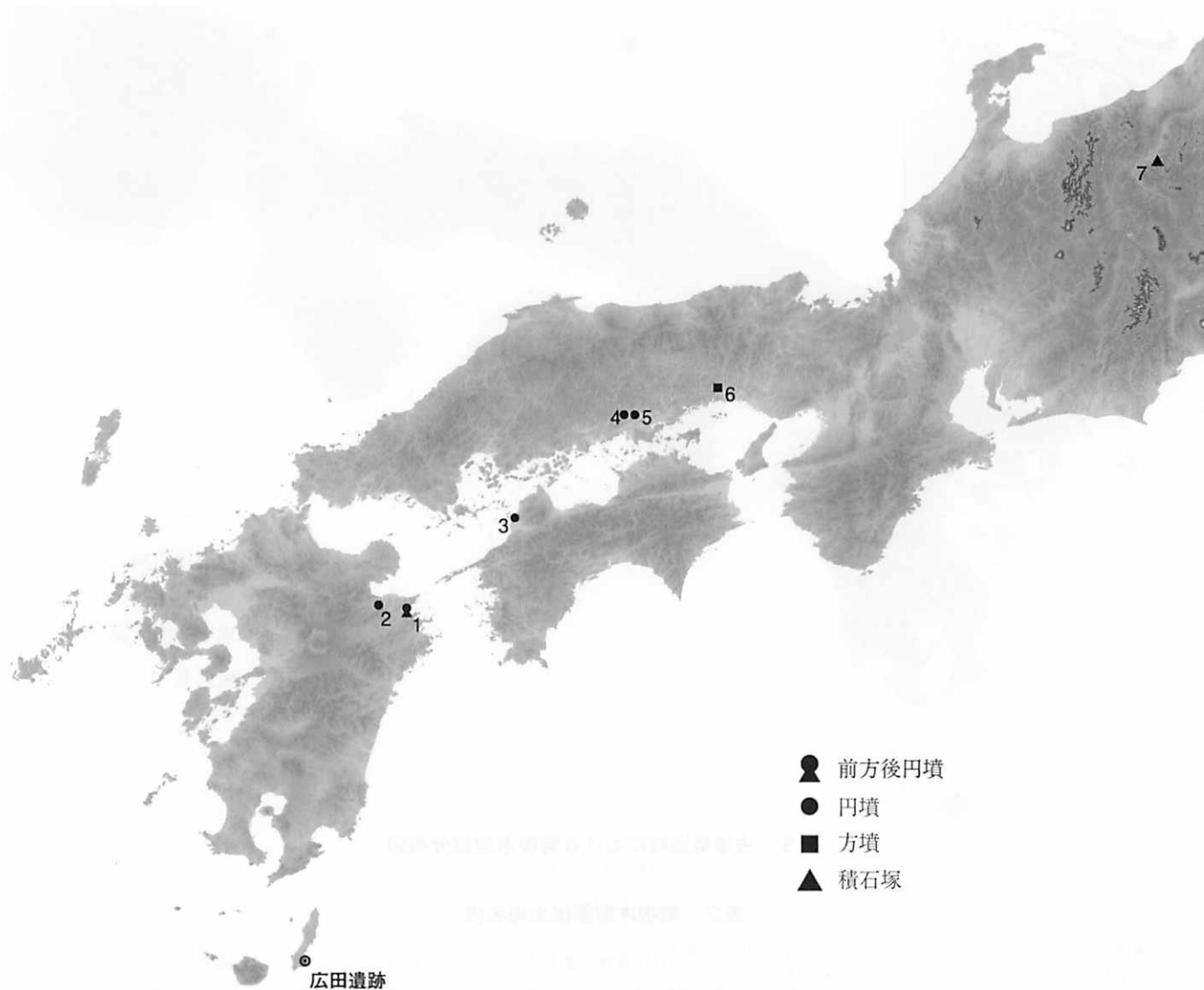


図4 古墳築造域における広田下層型釧分布図

図中番号は表1に対応

表1 広田下層型釧出土地名表

番号	遺跡名 所在地	墳形 主体部	出土数・出土位置 着装状況	共伴遺物（広田下層型釧に伴うもの）	備考
1	白塚古墳 大分県白杵市	前方後円墳 舟形石棺	1点・石棺内 非着装	鉄剣、鉄刀、鉄鎌、鉄鉾、三角板皮綴短甲、位至三公鏡、 獸帯鏡、勾玉、管玉、イモガイ製釧。	イモガイ製釧も非着装。墳丘 には、短甲形石人有り。
2	世利門古墳 大分県大分市	円墳 家形石棺	1点・石棺内 着装不明	鉄剣、鉄鎌、鉄釧、堅櫛、イモガイ製釧。	広田下層型釧には列点文有り。 イモガイ製釧は組み合わせ式。 石棺内は五体以上の合葬。
3	平山古墳 愛媛県松山市	円墳 箱式石棺	1点・石棺内 男性右腕着装か	鉄刀。	貝釧は現存せず（図面のみ）。 他に2基の石棺を検出。
4	牛塚古墳 岡山県総社市	円墳 箱式石棺	2点・石棺内 男性両腕着装	不明。	
5	緑山古墳群 岡山県総社市	不明	1点・不明 不明	不明。	表採品のため詳細不明。
6	新宮東山2号墳 兵庫県たつの市	方墳 箱式石棺	1点・石棺内 男性右腕着装か	金銅製飾金具、鉄剣、鹿角製刀装具、石枕。	広田下層型釧には列点文有り。 他に3基の木棺を検出。それ ぞれ、鉄製武器、琴柱形石製 品、堅櫛などが出土。
7	八丁鑑塚1号墳 長野県須坂市	円形積石塚	3～4点・積石中 着装不明	鉄鎌、鉄刀、鉄鉾、方格規矩四神鏡、家形埴輪、円筒埴 輪、勾玉、管玉、玉類、石枕、スジガイ製釧。	スジガイ製釧には列点文有 り。

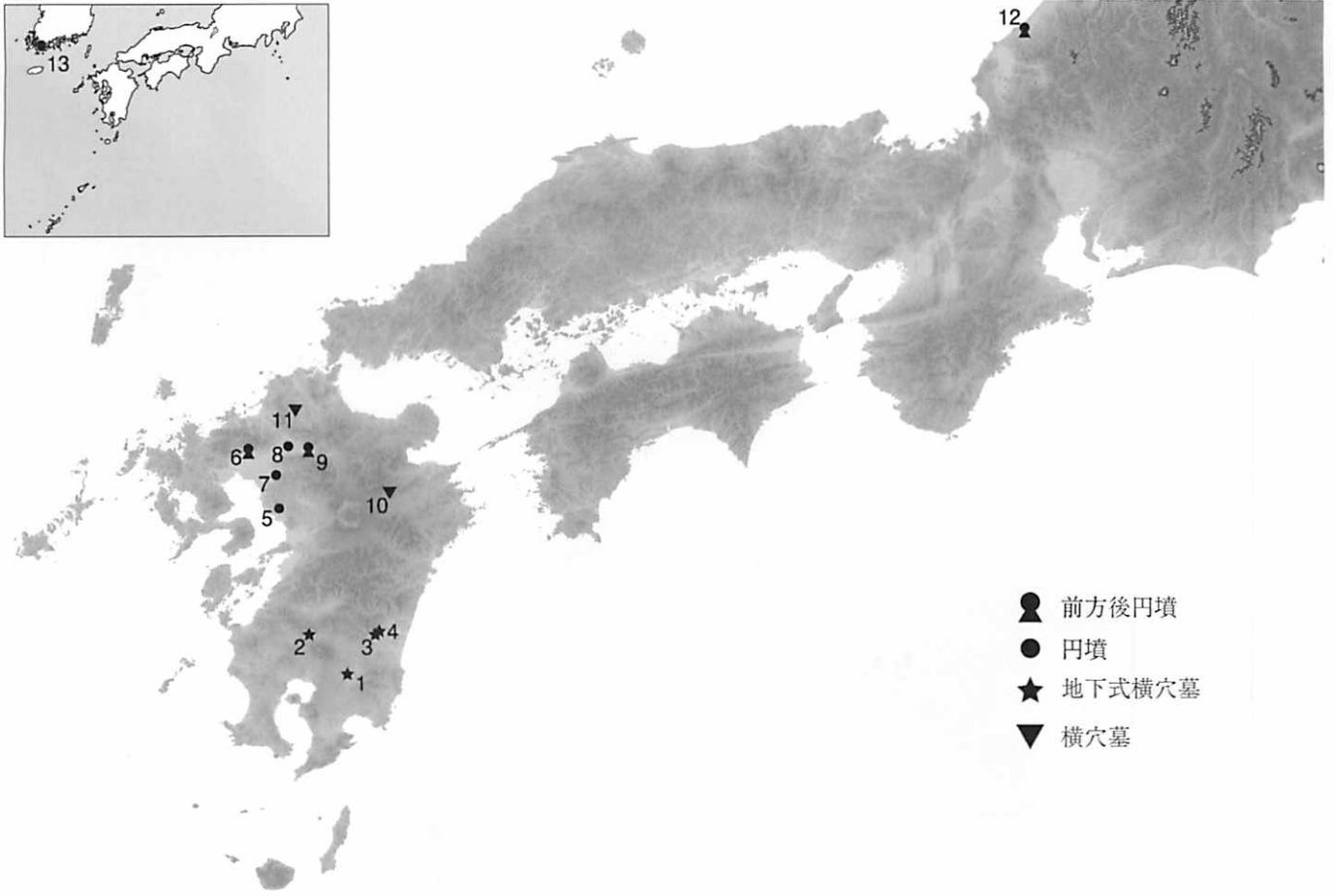


図5 古墳築造域における繁根木型釧分布図

図中番号は表2に対応

表2 繁根木型釧出土地名表

番号	遺跡名 所在地	墳形 主体部	出土数・出土位置 着装状況	共伴遺物（繁根木型釧に伴うもの）	備考
1	菓子野57-5号地下式横穴墓 宮崎県都城市	地下式横穴墓	1点・玄室内 男性右腕着装	鉄鏃、イモガイ製釧。	イモガイ製釧は、別男性の左腕に8点着装。
2	島内89号地下式横穴墓 宮崎県えびの市	地下式横穴墓	1点・玄室内 男性左腕着装	鉄鏃、鹿角装刀子、刀子、鹿角装鉄剣。	
3	大坪1号地下式横穴墓 宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴墓	1点・玄室内 着装不明	鉄剣、鉄刀、倣製獸文鏡、刀子、鉄斧、U字形鉄鋤先、鏃、鹿角製刀装具。	
4	初木1号地下式横穴墓 宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴墓	1点・玄室内 男性右腕着装	鉄刀、鉄鏃、鉄斧、管玉、丸玉、連玉。	
5	伝左山古墳 熊本県玉名市	円墳 舟形石棺	3点・石棺内 着装不明	鉄刀、鉄槍、不明鉄器。	石障系横穴式石室からは、横刳板鉄留短甲等の甲冑が出土。
6	関行丸古墳 佐賀県佐賀市	前方後円墳 横穴式石室	1点・石室内 着装不明	珠文鏡、金銅製冠帽、刀子、鹿角柄尖頭工具。	別屍床からは、金銅製冠帽、馬具類、イモガイ製釧が出土。
7	名木野9号墳 福岡県みやま市	円墳 横穴式石室	2点・石室内 着装不明	鉄鏃、青銅製金張揺鈴、勾玉、管玉。	
8	本郷鶯塚3号墳 福岡県三井郡大刀洗町	円墳 竪穴系横口式石室	1点・石室内 着装不明	鉄斧、刀子、鉄鏃、鏃、木芯鉄板張輪鏃？、勾玉、管玉、小玉、玉類。	別屍床からも、遺物出土。周溝からは鏃壺出土。
9	塚堂古墳 福岡県うきは市	前方後円墳 横穴式石室	1点・前方部石室内 着装不明	倣製神獸鏡、横刳板鉄留短甲、横刳板皮綴短甲、三角板鉄留短甲、挂甲、肩甲、頸甲、鉸具、鉄刀、鉄鉾、鉄鏃、胡録、刀子、勾玉、管玉、白玉、砥石、滑石製有孔円盤。	後円部石室、前方部石室前庭からは、馬具類や胡録、金銅製鍔斗などの遺物が多数出土。
10	長湯7号横穴墓 大分県竹田市	横穴墓	1点・玄室内 着装不明	鉄剣、鉄刀、鹿角装具、石枕、ヤコウガイ製鐘飾品。	
11	櫛山横穴墓 福岡県飯塚市	横穴墓	1点・玄室内出土か 着装不明	金銅製帯金具、鉄鏃、鉄刀、不明鉄器、曲刃鎌、U字形鉄鋤先、鉄斧、鏃、刀子、楕円形鏡板付轡、劍菱形杏葉、砥石。	
12	二子塚狐山古墳 石川県加賀市	前方後円墳 箱式石棺	2点・石棺内 着装不明	画文帯神獸鏡、銅鈴、帯金具、鉄刀、鉄剣、鉄槍、鉄鉾、刀子、鉄鏃、横刳板鉄留衝角付冑、横刳板鉄留短甲、小札、篠籠手、勾玉、管玉、玉類。	
13	月松里造山古墳 大韓民国全羅南道海南郡	円墳 横穴式石室	1点・石室内 着装不明	環頭大刀、鉄鉾、鉄製石突、鉄鏃、U字形鏡板付轡、劍菱形杏葉、鏃、銅鈴、鉄斧、U字形鉄鋤先、鏃、勾玉、管玉、小玉、須恵器、珠文鏡。	

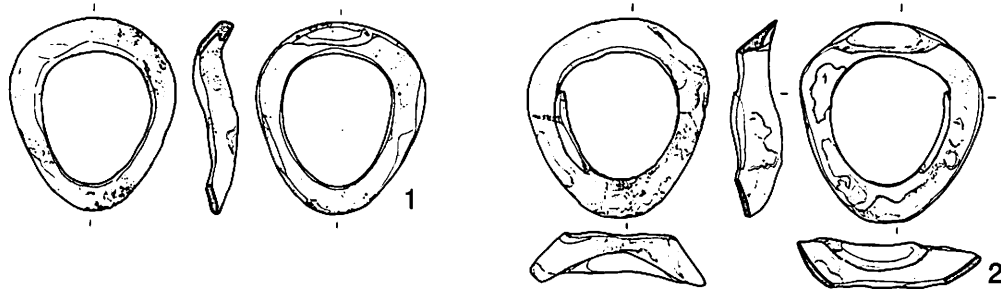
1.4. 消費地におけるゴホウラ背面釧変遷上の画期

以上の検討結果より、古墳築造域におけるゴホウラ背面釧の様相が明らかになった。しかしながら、ゴホウラ背面釧の消費地は古墳築造域だけではない。すでに繰り返し組上に載せている種子島の広田遺跡もまた消費地の一つである。そこで、古墳築造域と広田遺跡のゴホウラ背面釧の比較検討を通し、消費地全体でのゴホウラ背面釧の変遷について言及したい。

広田遺跡は種子島の砂丘上に立地する埋葬遺跡であり、数多くのゴホウラやイモガイといった琉球列島産貝の製品が出土している。これらは、概ね古墳時代に併行しているとされ、層位的な変遷に伴い埋葬形態や共伴する貝製品も変化することが指摘されている（広田遺跡学術調査研究会編2003）。このうち、古墳築造域のゴホウラ背面釧に対応する段階は、広田遺跡の下層段階にあたる。そこで、広田遺跡下層におけるゴホウラ背面釧を見ると、左右対称の楕円形を呈した一群（A群）が存在する（図6-1、2）。これは、部位①～③の加工状況や法量をみても古墳築造域の広田下層型釧との大きな差異は見当たらない。一方、B群・C群に関しては、A群とは大きく形状が異なる（図6-3～6）。B群は、A群と比べ貝釧の厚みが増し、輪の幅も大きくなる。素材の部位①～③に目を向けると、部位①は概ね除去されているが、若干の膨らみを確認できるものもある（図6-4）。部位②に関しては、独特な曲線をやや確認できるものもあるが、繁根木型釧のように明確なものは存在しない。また、部位③に関しては、螺塔まで及ぶ広がりはない。C群については、B群との大きな差異を看取できないもの（図6-5）もあるが、明らかに異なる形状（図6-6）も存在する。これは、横方向の楕円形を呈する外形など、広田遺跡の上層で出土するゴホウラ製貝輪に近似するものであり、繁根木型釧の形状とは大きく異なる。最近、山野ケン陽次郎は、広田遺跡の下層の埋葬形態や副葬品などを対象に総合的な分析を加え、7群に分類しそれぞれが段階的に変遷していったことを指摘している（山野2012）。これによると、図6のA群～C群のゴホウラ背面釧は、それぞれ第5群（第5段階）～第7群（第7段階）に該当する（図7）。また、編年的には、それぞれ古墳時代前期後半～中期前半、古墳時代中期前半～中期後半、古墳時代中期後半～後期に位置づけられている。A群の広田下層型釧は、古墳築造域と広田遺跡における編年的な齟齬はない。一方、古墳築造域において広田下層型釧が姿を消し、代わって繁根木型釧が登場する過程にあたるB群～C群の段階では、広田下層型釧でも繁根木型釧でもないゴホウラ背面釧が使用されている。特に、山野が「上層期への移行期」（山野2012）とした段階に、広田上層タイプに近似する例（図6-6）が存在することは、広田遺跡では最終的に繁根木型釧が使用（採用）されなかった結果を表している⁽⁸⁾。以上の変遷から推測すると、古墳築造域と広田遺跡の関係性について、古墳時代前期末から中期前半にかけて存在した活発な交流は、古墳時代中期後半から後期初頭にかけて徐々に変化していったと考えられる。

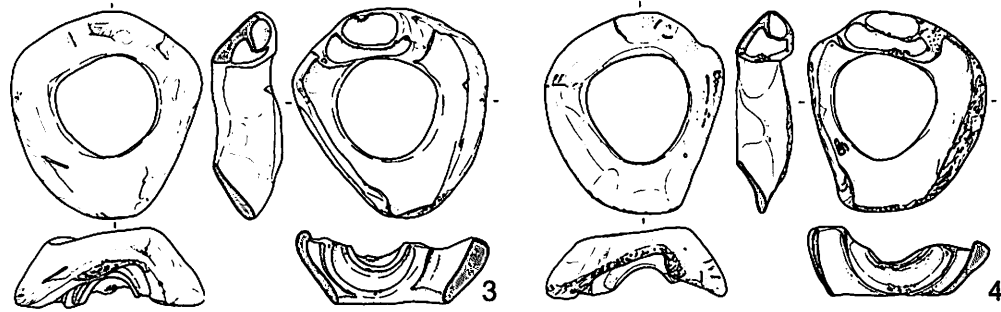
では、古墳築造域ではどうか。古墳時代前期末から中期前半の広田下層型釧は、九州北東部から本州中部地方の内陸部にいたる広範な分布を示したが、それ以降、これらの地域にはゴホウラはおろか、琉球列島産貝釧の使用が見られなくなる。また、古墳時代中期前半に南部九州では初めてイモガイ製釧やオオツタノハ製釧が使用されるものの、ゴホウラを素材としたものは選択されていない。一方、古墳時代中期後半になると、広田下層型釧が姿を消し、代わって繁根木型釧が南部九州、そして有明海沿岸や筑後川流域といった北部九州に分布するようになる。朝鮮半島において、繁根木型釧やイモガイで装飾された馬具（イモガイ装馬具）が流通するのもこの頃である（中村2010）。こうしてみると、古墳築造域と広田遺跡の間でゴホウラ背面釧製作の意図が乖離し、古墳築造域においても琉球列島産貝釧の主要消費地が変化した、古墳時代中期前半と後半の境（5世紀中葉）を中心としたその前後段階が、ゴホウラを含めた琉球列島産貝をめぐる流通において大きな画期となったといえる（図7）。

第Ⅱ部



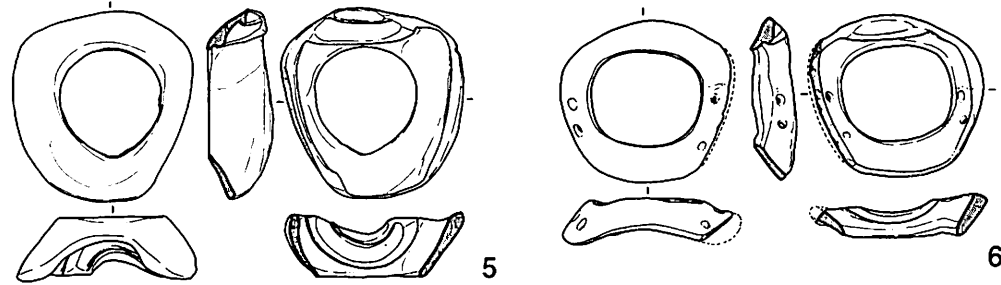
広田遺跡下層段階A群

C地区14号人骨。
部位①～③を全て除去（改変）する。
= 広田下層型釧。



広田遺跡下層段階B群

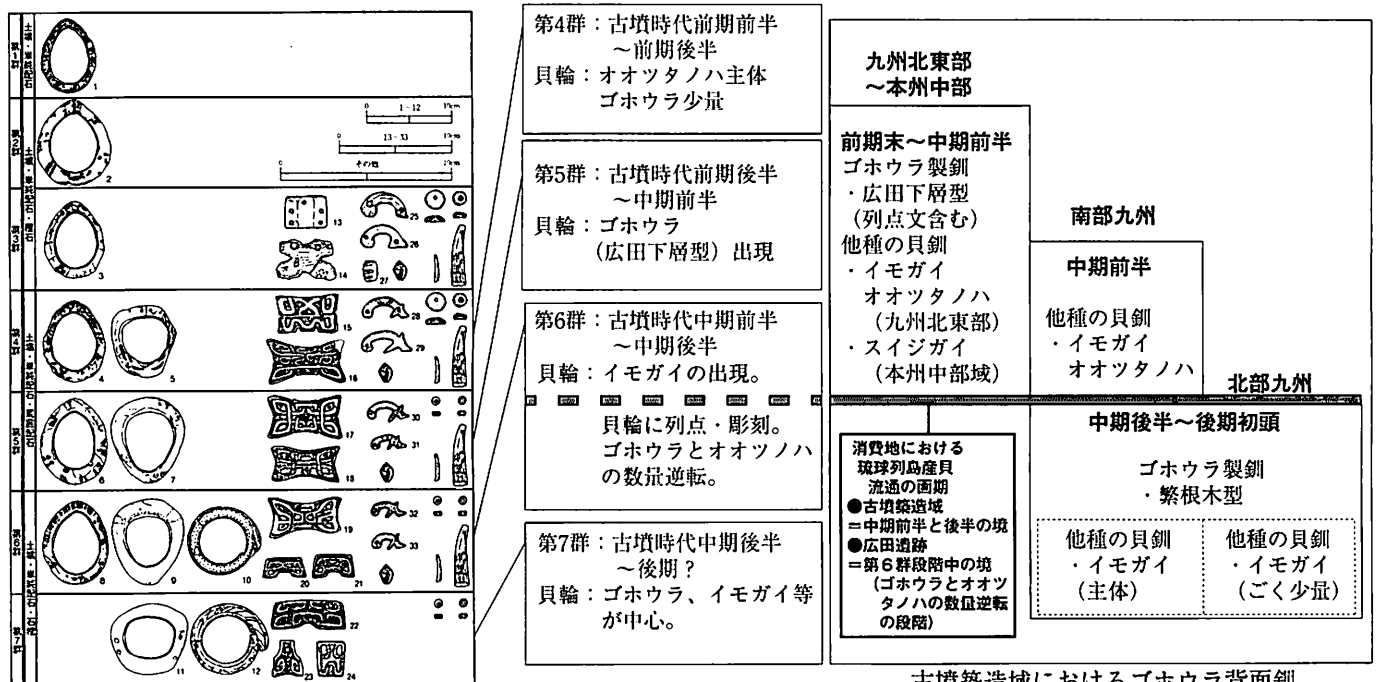
EⅢ地区2号人骨。
部位①・部位②を確認できるものがある。
部位③には、大きな広がりを確認できるものはない。広田下層型釧に比べ、厚みが増す。
= 古墳築造域と同様の変化も看取できるが繁根木型釧とは異なる。



広田遺跡下層段階C群

DⅠ地区3号群人骨。
B群に近似するものもあるが、広田上層タイプ（一大結節部を残し、隅丸方形を呈する）に近い形状のものもある。
= 繁根木型釧との形状の乖離。

図6 広田遺跡出土ゴホウラ背面釧（縮尺：1/4）



広田遺跡下層における貝製品の段階的変遷（山野2012を改変）

古墳築造域におけるゴホウラ背面釧と他種素材の貝釧の段階的変遷

図7 広田遺跡と古墳築造域における琉球列島産貝流通の段階的変遷

2. ゴホウラ背面釧の未製品

2.1. 沖永良部島採集のゴホウラ釧未製品

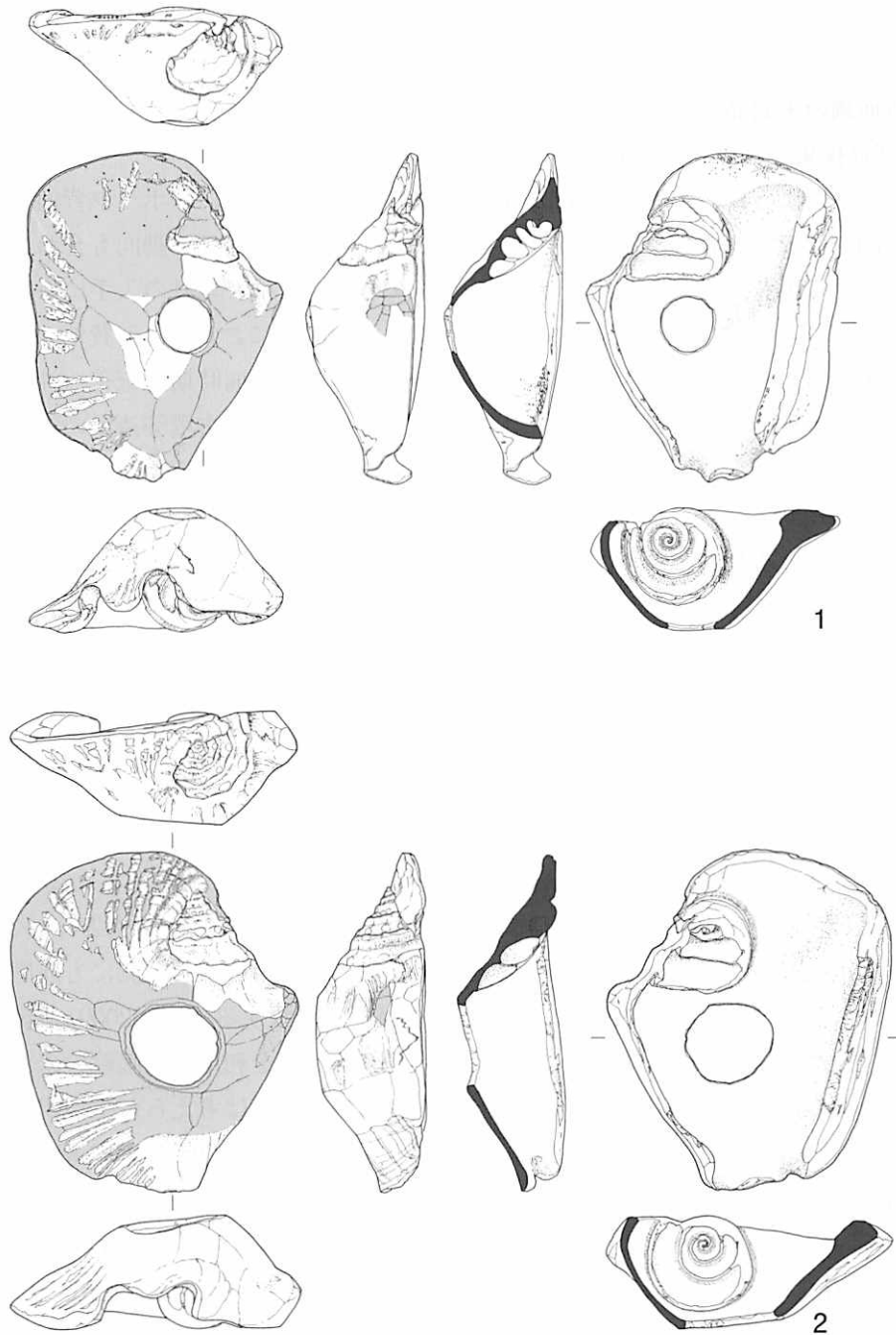
これまで述べてきたように、古墳築造域や広田遺跡などの消費地では、ゴホウラ背面釧の形状の変化や分布に段階的な変遷が認められる。また、他種素材の琉球列島産貝釧の動向も合わせると、琉球列島産貝流通における消費地の明瞭な変遷と画期を看取できる。では、素材の入手にいたる過程においても同様のことがいえるのだろうか。すなわち、奄美・沖縄諸島において、消費地の変遷や画期との対応関係を見出すことが可能かどうかという点に置き換えられる。同時期の奄美・沖縄諸島では、広田下層型釧や繁根木型釧と考えられる製品は出土していない。また、古墳築造域の遺物の出土は、南部九州の土器や、鉄製品が少量確認されるに留まっている。そのため、両者の関係性を論じることは困難なものになっている⁽⁹⁾。しかしながら、琉球列島産貝釧の未製品と考えられる資料は確認できるため、消費地における製品との製作工程上の対応関係を検討することで、両地域の関係性を指摘できる可能性がある。ここでは、ゴホウラ背面釧の未製品と考えられる一資料を検討し、製作工程上の対応関係について検討する。

今回、検討対象とする資料は、鹿児島県大島郡和泊町（沖永良部島）の西原海岸で採集されたもので、同形状に加工されたゴホウラ2点である（図8）。まず腹面側を見ると、螺腹部は除去されているものの螺層は確認できる。背面側は、螺背部の中央に穿孔が施されているものの、素材の部位①～③については全て残存している。最も注目すべき点は、表面に残る研磨痕である。過剰とも考えられる研磨は、素材そのものの形状を改変（稜線が作り出され、平坦面が形成されている）させるにいたっている。ただし、全ての研磨痕に認められるのではなく、特に、穿孔部の周辺や一大結節に顕著である。なお、図示していないが、螺腹部除去後の割れ面や外唇といった腹面側にも研磨が及んでいる。以上の所見は、先にこの資料を検討した新里貴之の見解と合致する（新里2009）。新里はこれらの加工状況から、①螺腹部の除去や螺背部の穿孔⇒ゴホウラ背面部を利用した腕輪の未製品であること、②大部分に認められる研磨痕⇒すでにこの段階からの大幅な加工は考えられず、現状が製品の姿に近いものを示していることを指摘し、その製品の候補として、繁根木型釧や広田遺跡B・C群の貝釧、及び広田遺跡上層タイプの貝輪を想定している。

さて、今回の検討で注目したいのは、一大結節における研磨である。本来、瘤状の突起であるものの滑らかな曲線を有するこの部位は、過剰な研磨を通して数面の平坦面が作り出されている。図8-1にいたっては、切り合い関係を確認できるほど明瞭な痕跡であった。この過剰な研磨の結果、一大結節には角張った形状が造り出されている。このような形状の突起を有するゴホウラ背面釧は存在しない。これらを考慮し、この部位の研磨には、一大結節を除去する目的があったと捉えたい⁽¹⁰⁾。このように形状を変化させるほどの研磨痕は、先に述べたように一大結節と螺背中央の孔周辺に限られている。そのため、一般的に考えられている、最終段階での研磨痕（仕上げ）とは性格的に異なると考えられる。以上の検討の結果、先に新里が示した製品の候補のうち、部位①を採用する広田遺跡上層タイプは除外される。残った候補のうち、部位①を改変し、部位②を採用、かつ部位③に見られる研磨を、大幅に形状を変えるためのものではないとしたら、当資料は繁根木型釧の完成を目的とした、限りなく製品に近い（腕輪孔や外縁の仕上げを除く）未製品であるといえよう⁽¹¹⁾。

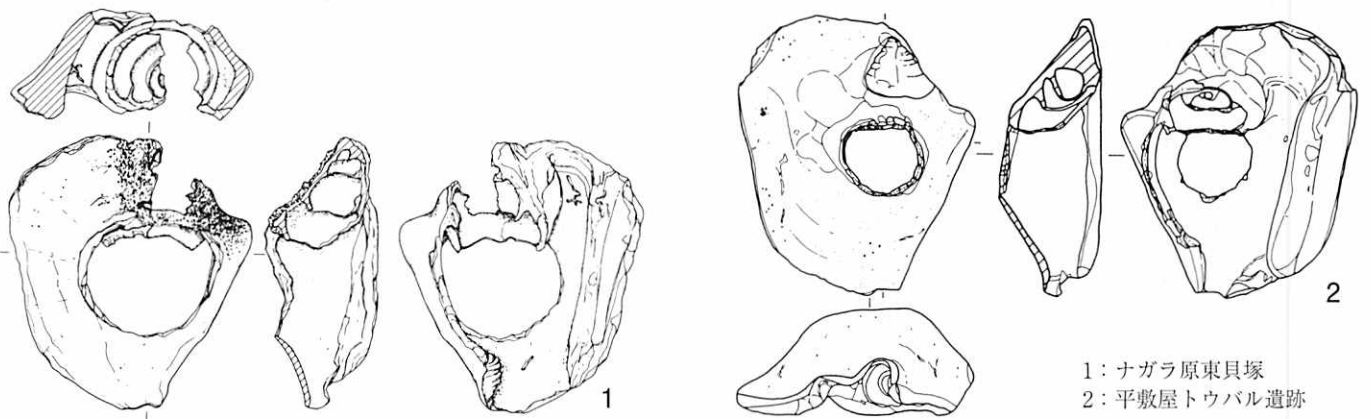
2.2. 沖縄諸島出土のゴホウラ背面釧未製品との比較

それでは、同様の未製品は他の地域でも確認できるのだろうか。沖縄諸島でも、類似する形状の資料をいくつか看取できる。その代表的なものを図9に示した。ともに、貝塚時代後期の中でも、弥生時代後期後半から古墳時代に位置づけられる資料である。沖永良部島採集資料と共通しているのは、



※トーン部は、研磨痕。もっとも顕著な背面部及び一大結節側面部のみを示す。

図8 沖永良部島採集ゴホウラ背面釧未製品 (縮尺: 1/4)



1: ナガラ原東貝塚
2: 平敷屋トウバル遺跡

図9 沖縄諸島出土ゴホウラ背面釧未製品 (縮尺: 1/4)

欠損している部位を除けば、螺背中央に穿孔を施し、螺腹部が除去されている形状を呈す点である。しかしながら、ナガラ原東貝塚例（図9-1）は、全体的に状態が悪く、沖永良部島採集資料のような研磨痕は確認できない。おそらく、加工途中で失敗し廃棄されたものと考えられる。また、平敷屋トウバル遺跡例（図9-2）は、沖永良部島採集資料と比較すると、「穿孔や背面部の研磨状況も酷似」しているものの、「外唇部側面に研磨を施す点や上唇部を除去する点、結節部に研磨を行わない点」が異なるとされる（新里2009）。このように全体の形状に限ると、加工の意図に共通点を看取できるため、ゴホウラ背面釧の未製品であることは指摘できる。しかし、沖永良部島採集資料に見られる、部位①の除去を目的とした過剰な研磨の痕跡は確認できないため、ゴホウラ背面釧のどの型式に対応するのかは判然としない。ただ、沖縄諸島では、ゴホウラに何らかの加工を施した資料が多量に出土し、流通用のストックと考えられる集積遺構も存在する。このことは、ゴホウラが生息する奄美諸島以南の島嶼域の中でも、実際に素材を提供した地域は沖縄諸島であったことを示唆している。ゆえに、図9-1のような加工に失敗したとされるもの（運ばれなかったもの）が多数を占めるのであろう。一方、実際にゴホウラを提供した沖縄諸島を離れ、消費地への流通経路途中にあった沖永良部島採集資料は、製品に耐えうるものとしての位置づけが可能である。もちろん、採集資料であることに注意しなければならないが、細部にわたる痕跡の有無のみだけでなく、流通経路上におけるそれぞれの分布の意味も注意しなければならないだろう。いずれにせよ、新里が指摘した平敷屋トウバル遺跡資料に看取できる類似点（背面部への研磨痕跡）などに注意しつつ、今後の資料の蓄積、及び既出資料の再検討を行う必要がある。

3. ゴホウラ背面釧の流通にみる古墳築造域と琉球列島との接点

まとめにかえて、ゴホウラ背面釧の流通における古墳築造域と琉球列島との関係性について言及したい。古墳築造域におけるゴホウラ背面釧は、古墳時代前期後葉から後期前葉の限られた期間、段階的な変遷をもって使用された。その変遷には、ゴホウラ背面釧の形状や分布状況から、古墳時代中期前半と後半の境（5世紀中葉）に大きな画期を見出せる。一方、古墳非築造域である種子島の広田遺跡でも、古墳築造域のゴホウラ背面釧使用開始と軌を一にして、同形状のゴホウラ背面釧が使用され始める。画期前段階（4世紀後半～5世紀前葉）では、広田遺跡と古墳築造域における、いわば“琉球列島系遺物”を介した密接な交流があったといえよう。画期後段階（5世紀後葉から6世紀前葉）では、ゴホウラ背面釧の形状（製作の意図）に差異が生じ、種子島所産と考えられるオオツタノハ製釧が古墳築造域で姿を消すことなど、両者の関係性に変化がみられる。画期前段階までの両者の関係性と比較すると、繁根木型釧の使用が停止する古墳時代後期前葉にかけて徐々に性質を異にするものになっていったと考えられる。そして、古墳築造域でのイモガイ利用が爆発的に増加する古墳時代後期後半に向け、琉球列島産貝をめぐる消費地の“二極化⁽¹²⁾”がすすんだと推測される（中村2007）。これら消費地の変遷に、奄美・沖縄諸島側はどう対応していったのか、積極的な見解を示すことはできない。ただ、素材を獲得・提供する沖縄諸島においてゴホウラ背面釧を目指した未製品（失敗品も含む）が出土し、中継地である沖永良部島において粗加工に成功し製品として成り立つ未製品が存在することは、古墳時代の消費地の動向に、奄美・沖縄諸島側が反応していたことを示唆している。さらに中継地の未製品に、消費地の段階的な変遷や地域差に関係する要素を看取できることは、消費地側の目まぐるしい変化に対し奄美・沖縄諸島側が適切な対応を行った結果継続しえた、“システム化”（新里2009）された古墳時代の琉球列島産貝流通の姿を見出せる。

おわりに

琉球列島産貝釧をめぐる消費地（古墳築造域と古墳非築造域である種子島広田遺跡）の様相には段階的な変遷を見出せる。それは、消費地間で相互に影響を与えつつ、徐々に独自性が顕在化していく過程に看取できた。一方、素材を提供する側である奄美・沖縄諸島は、段階的とはいえませんが、消費地側の大きな画期へ対応していた可能性がある。今回は、4世紀後半から5世紀にかけての検討に終始したが、これが6世紀後半になると、イモガイをめぐり、これまでとは比較できないほど多量かつ広範囲での消費地における利用が始まる。この変化に、“システム化”された琉球列島産貝流通がどのような変化をみせるのか、今後の検討課題である。

琉球列島産貝製品が古墳築造域において出土した場合、琉球列島と深い関与を推測される被葬者の存在が指摘される。もちろん、その可能性も多分にあると考えられるが、消費地の様相には、時として“琉球列島からもたらされた貝”という価値を見いだせない要素を示す事例が存在する。“ゴホウラがあるから”ではなく、どの地域に、どのような特徴をもったゴホウラが存在するのかを適切に認識する必要がある。それは、古墳築造域においても琉球列島においても共通する重要な視点であろう。本稿執筆を通じ、改めてそのことを痛感した。以上の観点のもと検討を行うことで、ゴホウラを含めた琉球列島産貝製品研究が、琉球列島における古墳時代の実態解明の一助になると考える。

本稿を作成するにあたり、貝交易研究班の川口陽子氏、山野ケン陽次郎氏には多大なご教授をいただき、以下の諸氏にはご助力を賜った。末文ながらご芳名を記し謝意を表したい。（五十音順、敬称略）

大西智和、甲斐貴充、鐘ヶ江賢二、上村俊雄、中野和浩、美濃口紀子、えびの市教育委員会、鹿児島国際大学、熊本市博物館、都城市教育委員会、宮崎県立西都原考古博物館

注

- (1) 大隅諸島以南の島嶼域にはいくつかの名称がある。木下尚子は、それぞれの背景を詳細に検討し、「歴史・文化的概念を含む」“南島”という名称を採用している（木下1996）。しかし、木下が指摘するように、“南島”という名称は、7世紀末を文献上の初出としている。そのため、本稿で対象とする古墳時代における名称に当てはまらなると考える。よって木下が、「地理学・地質学的概念」を含むとした“琉球列島”を本稿において使用する。ただし、“琉球列島”には、古墳時代における本土域との接点のない先島諸島も含まれている。本稿における“琉球列島”は、大隅諸島から沖縄諸島を指すものとして理解されたい。
- (2) 木下尚子は、石川県加賀市二子塚狐山古墳の資料について、形状の特徴から「繁根木型の前段階」との見解を述べている。繁根木型釧に段階的な変遷が存在する可能性を示す重要な指摘である（三浦2006）。
- (3) 愛媛県松山市平山古墳の資料は、遺物は現存していないもののスケッチ図が公表されており（井出2011）、その特徴を見ると、広田下層型釧に該当すると考えられる。
- (4) 南部九州（宮崎県内陸部や鹿児島県肝属平野）では、古墳時代中期になり初めて琉球列島産貝釧が使用され始める。その端緒となるのが、繁根木型釧の登場の前段階に見られるイモガイ・オオツタノハ製釧である。なお、オオツタノハ製釧は、繁根木型釧登場前に姿を消す。
- (5) ただ、ゴホウラ製釧の使用が完全に停止する古墳時代後期後半では、北部九州を中心にイモガイ製釧が多量に使用される。一方南部九州では、これまで琉球列島産貝釧が確認されていた地域（宮崎県内陸部や鹿児島県肝属平野）に、一切見られなくなる。
- (6) なお、以上の指摘は橋本達也によってすでになされている。橋本は、有明海沿岸や筑後川流域の繁根木型釧の分布について、単体で出土している点や他種素材の琉球列島産貝釧も含め面的でない点を指摘し、当地域における繁根木型釧を稀少財として位置づけた。一方、南部九州の繁根木型釧の分布には、まとまりを看取できることや

階層に関わらず他種素材の琉球列島産貝釧と同様に出土することを指摘し、常態的に入手可能なものであったとした。このような両地域における繁根木型釧の在り方の差異を踏まえ、南部九州から阿蘇ルート・日田ルートといった内陸を介して、有明海沿岸や筑後川流域へもたらされたとする流通ルートを想定している（橋本2010）。なお、南部九州においても、大坪1号地下式横穴墓や初木1号地下式横穴墓が所在する宮崎県東諸郡域では、繁根木型釧の出現をもって初めて当地で琉球列島産貝釧が使用され始める。このように、古墳築造域における流通・拡散は、先に示した繁根木型釧における形状差とも深く関連すると考えられるため別稿で改めて論じたい。

- (7) 杉井健は、東アジア全体の様相や古墳築造域の指標となる様々な遺物の編年観を考慮した対応案を示している（杉井2010）。一方、本稿ではゴホウラ背面釧のみを対象としており、古墳築造域所産の遺物の出土が極めて限定的な琉球列島との詳細な対応は困難な面もある。本稿における対応関係は、古墳築造域と琉球列島との関係を端的に理解するための便宜的なものとして理解されたい。
- (8) 木下尚子は、広田遺跡の貝輪にみられる変化（A群からB・C群にかけての形状の大型化）の時期が、繁根木型釧の成立と一致するとし、広田遺跡と古墳築造域の関連性を指摘している（木下2004b）。しかし、これまで述べてきたように、広田下層型釧から繁根木型釧への変化には、大型化という側面よりも、素材の“独特な部位”における改変から採用の変化に重点をおかれたことが関連すると考えられる。細部の加工から判断すると、繁根木型釧と広田遺跡B・C群とは同一とは言い難い。全く同形状であった広田下層型釧から、形状差の見られる貝釧（古墳築造域：繁根木型釧、広田遺跡：B・C群）へ変化していったことは、ゴホウラ背面釧の製作意図が徐々に乖離していったとも解釈できないだろうか。
- (9) 一方で、種子島広田遺跡から大量に出土するイモガイ製貝符に関しては、広田遺跡の変遷に対応するものが奄美・沖縄諸島で確認されている。
- (10) なお、この見解は、筆者独自のものではなく、貝交易研究班（木下尚子、川口陽子、山野ケン陽次郎各氏、筆者）による第1回研究会での討議で導き出されたものである。
- (11) ただ、部位②は現状で確認できるものの、周辺には平坦面が形成されるほどの研磨痕がみられる。これを、独特の曲線を改変するためのものであるとしたら、広田遺跡のB・C群の貝釧の可能性も存在する。
- (12) この場合の“二極化”とは、両者の交流が必ずしも断絶したとするものではないが、少なくとも画期前段階までに見られた密接な交流は希薄化していった可能性もある。

文献

- 井出耕二 2011「松山市太山町平山古墳出土の貝釧をめぐって－昭和初期の調査記録をもとに－」『愛媛考古学 第19・20号－名本二六雄氏古希記念特集号－』、pp.61～76、愛媛考古学協会
- 梅原末治ほか 1925「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査（第一回）」『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』第二冊、pp.80～90、熊本県
- えびの市教育委員会（編）2012『島内地下式横穴墓群Ⅳ』、えびの市教育委員会
- 大分県教育委員会（編）2004『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』、大分県教育委員会
- 沖縄県教育委員会（編）1996『平敷屋トウバル遺跡』、沖縄県教育委員会
- 賀川光夫 1958「五遺骸以上合葬の一例－大分県（豊後）大分村大字木上字世利門古墳－」『考古学雑誌』44巻1号、pp.49～60、日本考古学会
- 賀川光夫 2000「臼塚古墳について」『考古叢長－豊後海部の遺跡と遺物－』、pp.1～9、別府大学史学研究会・大分県考古学会
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究』、法政大学出版局
- 木下尚子 2000「八丁鎧塚1号墳スিজガイ・ゴホウラ釧について」『長野県史跡 八丁鎧塚』、pp.49～63、須坂市教育委員会
- 木下尚子 2002「韓半島の琉球列島産貝製品－1～7世紀を対象に－」『韓半島考古学論叢』、pp.503～544、すずさわ

第Ⅱ部

書店

- 木下尚子 2004a「長湯横穴群7号墓出土のゴホウラ釧とヤコウガイ製品」『長湯横穴群 桑畑遺跡』、pp.77～81、大分県教育委員会
- 木下尚子 2004b「種子島の貝製品・貝文化」『考古資料大観12貝塚後期文化』、pp.242～249、小学館
- 木村幾多郎 1980「所謂広田型貝輪の細分について」『史淵』117、pp.91～126、九州大学文学部
- 佐賀県教育委員会（編）1958『佐賀市関行九古墳』、佐賀県教育委員会
- 嶋田光一 1991「福岡県榎山古墳の再検討」『古文化論叢 児嶋隆人先生喜寿記念論集』、pp.507～557、児嶋隆人先生喜寿記念事業会
- 新里貴之 2009「沖永良部島のゴホウラ貝輪未製品資料」『南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表選歴記念論文集』中巻、pp.91～104、南九州縄文研究会 新東晃一代表選歴記念論文集刊行会
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』、pp.127～180、九州前方後円墳研究会
- 須坂市教育委員会（編）2000『長野県史跡 八丁鎧塚』、須坂市教育委員会
- 瀬高町教育委員会（編）1977『名木野古墳群』、瀬高町教育委員会
- 第10回九州前方後円墳研究会（編）2007『九州島における中期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会
- 大刀洗教育委員会（編）2005『本郷築塚3号墳 本郷野開遺跡VI』、大刀洗町教育委員会
- 中村友昭 2007「古墳時代の文化交流」『考古学ジャーナル』564、pp.21～25、ニューサイエンス社
- 中村友昭 2008「岡崎18号墳2号地下式横穴墓出土の貝釧」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』、pp.243～256、鹿児島大学総合研究博物館
- 中村友昭 2010「古墳時代後期のイモガイ装馬具に関する基礎的研究－築池2003-3号地下式横穴墓出土例をもとに－」『先史学考古学論究』V、pp.503～523、龍田考古会
- 朴天秀 2002「栄山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」『考古学研究』49-2、pp.42～59、考古学研究会
- 橋本達也 2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』、pp.91～108、高知大学人文社会科学系
- 広田遺跡学術調査研究会（編）2003『種子島 広田遺跡』、鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 藤江 望編 1998『考古学研究室報告』第34集、熊本大学文学部考古学研究室
- 前角和夫 2001「岡山県納整センター造成事業に伴う市後遺跡群の発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』11、pp.29～34、総社市教育委員会
- 三浦俊明 2006「二子塚狐山古墳出土の貝釧－狐山古墳の写真資料から－」『石川考古学研究会々誌』第49号、pp.47～56、石川県考古学研究会
- 都城市教育委員会（編）1983『都城・中之城跡 菓子野地下式横穴』、都城市教育委員会
- 宮崎県教育委員会（編）1970『宮崎県文化財調査報告書』第15集、宮崎県教育委員会
- 宮崎県埋蔵文化財センター（編）2010『初木地下式横穴墓群』、宮崎県埋蔵文化財センター
- 山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化』第63巻第4号、pp.6～26、古代学協会
- 吉井町教育委員会（編）1990『若宮古墳群Ⅱ－塚堂古墳・日岡古墳－』、吉井町教育委員会

挿図出典

図2：1～3. 木下2000。図3：1. 木下2000、2, 4. 筆者作図、3, 5, 6, 8. 木下1996、7. 木下2004a。図6：1～6. 広田遺跡学術調査研究会（編）2003。図8：1は筆者、2は山野ケン陽次郎氏作成後、木下尚子氏による製図。図9：1. 藤江 望（編）1998、2. 沖縄県教育委員会（編）1996。なお、図4、5の地図は、カシミール3Dを用いて作成した。